

当然のことはしただけ —杉原千畝 命を救ったビザ—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

公文書偽造事件などで役人の付度が白日のもとにさらされた。付度の本来の語意は他者の意向を押し量ることだ。ところが現在では自分より目上の者の顔色を見て追従するイエスマンの代名詞に変化した。役人の場合、目上の者とは上司、政治家、権力者などを意味している。

主体性のないイエスマンになることを拒否した外交官の杉原千畝（1900-1986）は自分の良心に従って行動した。第2次世界大戦中、リトアニアに赴任していた杉原はナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ系難民に大量のビザ（通過査証）を発給し、約6千人もの命を救った。

しかし当時の日本はドイツ、イタリアと日独伊3国軍事同盟を結んでおり、ユダヤ系難民の救済はヒトラー政権への敵対行為と見做されていた。上司の命令に背き、独断でビザを発行した杉原は戦後、国賊の汚名を着せられて外務省を去る。

満州国外交部を辞職

杉原は現在の岐阜県美濃市で生まれた。税務署に勤めていた父の転勤に伴い名古屋市の古渡尋常小学校（名古屋市立平和小学校）に転校し、愛知県から操行善良学力優等で表彰されるなど優秀な成績で卒業した。

旧制愛知県立第五中学校（愛知県立瑞陵高校）卒業後、医者になることを望んでいた父に逆らって上京し、早稲田大学高等師範部英語科（早稲田

大学教育学部英語英文科）に入学する。父を怒らせたせいで仕送りはなく牛乳配達などアルバイトを掛け持ちして学費と生活費を稼いでいた。

1917年、レーニンを指導者とするロシア革命で史上初のソビエト社会主義連邦が誕生する。2年後、杉原は学費が支給される外務省留学生試験に合格し、早稲田を中退して官費留学生となる。

外務省から中華民国のハルピン学院に派遣され、徹底的にロシア語を学んだ。校長は半官半民の満鉄（南満州鉄道株式会社）の初代総裁である後藤新平で「人のお世話にならぬよう 人のお世話をするよう そして報いを求めぬよう」を校訓としていた。杉原はこの自治三訣を座右の銘として勉学に励み、やがてハルピン学院からロシア語の講師に抜擢される。

卒業後、ハルピン総領事館に勤務し、ロシア人女性と結婚した。在任中に書き上げた600ページに及ぶソ連経済のレポートが高く評価され、外務省から書籍として出版された。

ソ連通として頭角をあらわした若き杉原は1932年、満州国外交部事務官に任命される。だが



杉原千畝

関東軍との折りあいがあるく3年後に辞職する。ソ連に対するスパイ活動を強要され、拒否すると妻がソ連のスパイであると誹謗中傷された。これがきっかけで離婚に追い込まれる。

帰国後、外務省に復帰し、友人の妹である菊池幸子と再婚した。妻に満州国外交部を辞めた理由を聴かれて「中国人をおなじ人間とっていない。それが我慢できなかった」と答えている。

世界は車輪のようなもの

1939年の夏、バルト海沿岸のリトアニア共和国カウナスに日本領事館が開設された。杉原は妻とふたりの子供を連れ、領事代理として赴任する。日本人のいないカウナスで杉原一家は注目の的になり、新聞で大々的に紹介された。着任後まもなくドイツがポーランドに侵攻し、第2次世界大戦が勃発する。翌年、ソ連軍がリトアニアを占領し、対ドイツ戦の緊張が高まった。

1940年7月の早朝、ドイツ占領下のポーランドから逃れてきたユダヤ系難民などがビザを求めて日本領事館に殺到した。杉原はその緊迫した模様を手記でリアルに伝えている。「私は急ぎカーテンの端の隙間から外をうかがう。ざっと100人も公邸の鉄柵に寄りかかって、こちらに向かって何かを訴えている光景が眼に映った」と。

難民たちはシベリア鉄道でソ連を横断し、日本を経由して亡命地へ向かうことを切望していた。外務省にビザの発行を打診するとドイツとの同盟関係を理由に却下された。ユダヤ人の窮状を熟知していた杉原は考えに考え抜き、たとえ命令に反してもビザの給付は「人道上、どうしても拒否できない」と罷免覚悟で決断する。妻も「私たちはどうなってもいいから助けましょう」と賛成した。

再三の命令を無視し、杉原は1カ月あまり寝る間も惜しんで2132枚の手書きのビザを発行した。その際、難民たちに「世界は大きな車輪のようなものですからね。対立したり、争ったりせずに、みんなで手をつなぎあって、まわっていかねばなりません」と励ましの言葉を贈っている。

外務省の異動命令で8月末に領事館を閉鎖し、カウナス駅から国際列車でベルリンへ向かった。難民たちが脱出したリトアニアは1941年、ソ連の

敗退でドイツに占領され、残っていたユダヤ人が虐殺された。杉原はチェコスロバキアのプラハ総領事館などを経てルーマニアのブカレスト公使館で終戦を迎える。1947年4月ようやく帰国したものの、外務省から自主的な退職を通告された。事実上の解雇に杉原は憤慨し、外務省と訣別する。

没後14年目に名誉回復

退官後は仕事を転々とし、ソ連との貿易商社に勤めてから何とか生活が安定した。1960年から川上貿易のモスクワ駐在員、1971年から国際交易のモスクワ事務所長を長く務めた。1978年、国際交易を退職してモスクワから帰国し、神奈川県鎌倉市で晩年を過ごす。

1985年、外交官時代に多くのユダヤ人を救済した功績を讃え、イスラエル政府から日本人として唯一「諸国民の中の正義の人」に選ばれる。記念のメダルには「ひとりの命を救うことは全世界を救うこととおなじである」という箴言が刻み込まれていた。思いがけず脚光を浴びることになった杉原は「大したことをしたわけではない。当然のことをしただけです」と淡々と語っている。

名声が高まるにつれて杉原に対する風あたりも強くなった。外務省の元上司などからユダヤ人に金をもらっていたと中傷され、同時に日本政府に逆らった国賊などと罵倒する匿名の手紙が届くようになった。それでも杉原は「もしおなじ事態に遭遇したら、私はもういちどおなじことをするに違いありません」と断言し、鎌倉市内の病院で86年の波瀾に充ちた生涯を閉じる。

日本政府は杉原の没後14年そして生誕100年にあたる2000年によりやく名誉回復のセレモニーを行った。外務省外交史料館に設置される顕彰プレートの除幕式に妻の幸子をはじめ家族が招待され、河野洋平外務大臣が正式に謝罪した。

リトアニアでは杉原の肖像を描いた記念切手が発行された。杉原一家がリトアニアを退去する際、カウナス駅にはビザを求める大勢の難民たちが詰めかけた。杉原は出発の時刻までビザを書き与えた。汽車が走り出すと「許して下さい。私にはもう書けない。皆さんのご無事を祈っています」と伝えて最後のひとりに車窓からビザを手渡した。